

## 井上靖 「聖者」論

— イシク・クル湖伝説と現代 —

高 木 伸 幸

### はじめに

井上靖の短篇「聖者」(一九六九年七月『海』)は、その物語末尾で「往古からイシク・クル湖畔の住民の間に伝承されている一篇の『説話』に拠る小説だと記されている。「イシク・クル湖」とは、旧ソビエト連邦のキルギス共和国内、天山山中にある湖である。従って、この作家における、いわゆる歴史小説、それも西域物の系列に含まれる小説と言える。しかし「叙事詩的」という大きな枠組みで論じられることの多かった井上靖の西域物<sup>①</sup>の中で、比較的遅い時期に書かれたこの「聖者」は、他の西域物と異なる評価が与えられている。佐伯彰一は「聖者」の発表直後、「文芸時評(下)」(一九六九年六月二六日『読売新聞(夕刊)』)に取り上げ、「現代的な寓意」が見られることを指摘した。

中村光夫もやはり「文芸時評(下)」(一九六九年六月二八日『朝

日新聞(夕刊)』)に取り上げ、「聖者」は「近代社会にたいする風刺としても読め」る小説と捉えた。

さらに近年では、曾根博義が「解説・浄化と再生―井上靖の歴史小説」(『異域の人・幽鬼』二〇〇四年二月、講談社文芸文庫)で、「同じ西域ものでも昭和四十年代になって書かれた『聖者』は「諸作とはだいぶ異なった、寓話的、文明批評的要素の強い作品」と論じた。「当時の井上靖の長篇には、『夜の声』や『樺の木』など、近代化や都市化に伴う公害や環境破壊などに警告を発した文明批評的的作品が目立つ。『聖者』もその系列に属する短篇と見なしてよいだろう」とも記している。

これらは「聖者」のモチーフを大まかに押えた批評として肯定できよう。確かに「聖者」は古代西域を舞台にした、いわゆる歴史小説でありながら、そこに展開される物語は、現代社会に対する寓意、諷刺の趣を呈している。「聖者」は西域物であると同時に、曾根博

義が論ずるところ、「文明批評的作品」の系列にも属する短篇と言えるだろう。

しかし「聖者」を現代社会（文明）に対する寓意、諷刺の小説として捉えた場合、その寓意、諷刺の内実、つまり同時代の日本の社会状況がそこどのように表されているか、具体的かつ的確な考察は、上記の批評も含めてまだ見ることはできない。また西域を舞台にした、いわゆる歴史小説として捉える場合も、典拠となったイシク・クル湖畔における伝説が如何なる形で活かされているか、小説と史料の関係に至っては、これまで全く明らかにされていない。

結論を少し記せば、「聖者」はその創作過程において、井上靖のいわゆる歴史小説の方法を受け継ぐとともに、発表当時の社会状況を反映した小説と言える。その作品世界には史的な裏付のある表現が多く認められる上に、井上靖の現代社会への諷刺が、「夜の声」「樺の木」と一部重なりつつも、それら二作とは角度を変えた「文明批評」として展開されているのである。

以下、「聖者」における伝説小説化の方法と社会諷刺について考察を進めたい。

—

天山山脈北側の大きな盆地に営まれているサカ族の一氏族、約三千人の聚落が「聖者」の舞台である。「サカ族」とは匈奴が出現

する以前、「紀元前七世紀から前一世紀頃まで」中央アジアに活躍した遊牧民族であり、この小説では「前六世紀中葉」「サカ族擡頭期の頃」に時代が設定されている。そのサカ族の聚落には泉が一つしかなく、住民は一人「甕一杯」に水の量を制限されていた。泉には鍵を預かる「聖者」が居り、朝夕その「聖者」が、ただし「聖者」は「盲」「聾」「啞」者の老人のため、実際には「聖者」と一緒に暮す「十七歳の娘」が、泉の入口の開閉をしていた。この聚落に他氏族で成長した一人の「若者」が、出生以来二十数年ぶりに帰ってくる。「若者」は泉を神と崇める「古老たち」や自分の兄である聚落の首長と対立するが、彼らを退け、自らが聚落の首長となる。「若者」は泉の信仰を恐れず、水の量を一人「甕一杯」に改革。その結果、聚落は裕福で活気ある、賑やかな聚落へ変化した。しかし、一方で聚落には、かつてなかった「姦通」「窃盗」「刃傷沙汰」等の事件が多数発生。聚落全体が「淫靡な空気に覆われるようになった。「若者」は他氏族との戦闘から凱旋した夜、かねてから愛情を抱いていた、「聖者」と暮す「娘」を力づくで自分の寝室にとどまらせる。「娘」は刻限までに泉の入口を閉められず、夜の泉には兵士たちが殺到する。すると突然、泉から膨大な量の水が噴出。聚落は水の底に沈み、イシク・クル湖が形成された。

右の通り「聖者」は、古代西域の一聚落が水没へと至る過程を描き、イシク・クル湖の生成を明かした物語という体裁である。タイトル

にも取られている〈聖者〉の存在、〈神の怒り〉と言うべき物語の結末を見ると、古来より伝承されてきた説話に基づいた小説として、神話的・宗教的な雰囲気を感じさせる。同時に物語の全体、特に結末までの過程に目を向けると、主人公の「若者」を初めとする登場人物のさまざまな言動を通して、伝説の小説化には収まらぬ、作者独自のモチーフが表されているようでもある。

「聖者」における井上靖の表現意図をより正確に理解するためにも、小説と典拠との比較検証から考察を始めることとしたい。

井上靖は一九六五年五月および一九六八年五月の計二回、それぞれ約一ヶ月の間、中央アジア地域を含む旧ソビエト連邦各地の旅に出かけている。この二回の旅で、井上靖は旧ソ連キルギス共和国にあるイシク・クル湖畔に立つことを希望したが、ともに叶わなかったとのことである。しかしこれらの旅を通してイシク・クル湖生成にまつわる伝説について知識を得、「聖者」執筆のヒントを掴んだことは確実と言える。二回の旅には、どちらも中央アジア・シベリア民族史研究者である加藤九祚が同行していたからである。<sup>3)</sup>

加藤九祚は、井上靖のソ連旅行に同行するより約一年半前、『湖底に消えた都―イシク・クル湖探検記―』(ボリス・ジュエーコフ著、一九六三年一月、角川新書) 以下、『湖底に消えた都』を翻訳出版していた。イシク・クル湖は湖底に集落跡の認められる湖であった、同書はその考古学的調査を中心に記した一冊である。終盤では

湖底集落に関連して、イシク・クル湖生成にまつわるさまざまな伝説を紹介している。<sup>4)</sup> それらの伝説の中には、以下に引用する二つの伝説が含まれていた。

その一つは次のようである。<sup>5)</sup>

湖のある地域はむかし、都市のある広い平野であった。この都市には異端の住民が住んでいた。ひとりの罪深い女がここで大へんな放蕩をひろめた。そこで神さまが罪びとたちをこらしめるために、都市を水中に沈め、一帯を湖にしまったというのである。<sup>6)</sup>

いま一つは次の通り。<sup>6)</sup>

湖のある場所にはむかし都市があった。住民は特別の性質をもった井戸を利用していた。この井戸の水を汲み出した後は必ず鍵をかけるか、それとも重い石をのせなければならなかった。ひとりの少女が鍵番の聖者から鍵をうけとり、井戸を開けて水を持参の壺にみたした。そのとき彼女の恋人が近づいたので、二人は話に夢中になり、井戸に鍵をかけることを忘れてしまった。そのうちに水が井戸からふき出て、都市と谷を埋めたというのである。

加藤の訳書に記されたこれら二つの伝説を井上靖が参照し、「聖者」執筆に活かしたのは明らかであろう。井上靖は二度にわたるソビエト旅行の際、加藤九祚から直接さまざまなイシク・クル湖伝説

を教授された上に、訳書『湖底に消えた都』を紹介され、さらに同書に目を通した結果、右の二つの伝説から特に創作欲を喚起されたと見ることが出来る。「聖者」末尾には、「往古からイシク・クル湖畔の住民の間に伝承されている一篇の説話」に拠ると記されているが、正確に言えば、井上靖は複数ある伝説から二つを選び典拠として用いたのである。ちなみに第二回ソビエト旅行後に連載された井上靖の歴史紀行「西域物語」（一九六八年一月六日～一九六九年三月九日『朝日新聞（日曜版）』）においては、イシク・クル湖伝説に触れた文献として『湖底に消えた都』が挙げられ、かつ右の二つと同じ内容の伝説が、井上靖自身の言葉で紹介されている。このことから『湖底に消えた都』の中に見る二つの伝説が、井上靖の「聖者」執筆における主典拠であったことは裏付けられるのである。

イシク・クル湖生成にまつわる伝説と、小説「聖者」を見比べて直ちに気付かされるのは、井上靖が伝説二つを巧みに一つに合わせ、物語の骨格を創り上げていることである。一人の人物をきっかけにして、物語の舞台に「大へんな放蕩（作中では「淫靡な空気」）が広まっていくその設定は前者の伝説に拠り、「井戸（泉）」と「鍵番の聖者」の存在、ならびに「ひとりの少女（娘）」が「井戸に鍵をかけることを忘れ」た設定については後者の伝説から取り入れた。〈神の怒り〉による水没という物語の結末は、イシク・クル湖生成にまつわる伝説の当然の帰結点として、双方の伝説に基づいている

のである。

従ってこの小説において、神話的・宗教的な雰囲気醸し出している〈聖者〉の存在と結末における〈神の怒り〉は、井上靖の独創でない。小説「聖者」における神話的・宗教的な雰囲気は、作者の表現である以上に、典拠の伝説に拠る部分が大きく、むしろ材料を活かした表現と行うことができる。

対して典拠に見られない設定、表現も、「聖者」の中には、もちろん多く認められる。井上靖は二つの伝説に拠った上で、他にも多くの知識を集め、かつ自らの創作を加え、一つの小説として仕上げているのである。

例えば「聖者」の冒頭部、物語の時代が「サカ族擡頭期」に設定されている。しかし典拠の伝説では、どちらも何時の時代ということとは全く記されていない。そもそも二つの伝説では舞台が「都市」になっており、サカ族の「聚落」を舞台とする小説とは異なる年代と言わなければならない。実は『湖底に消えた都』を見ると、イシク・クル湖畔の「年代記のページ」として、サカ族の活躍について詳しく触れた一章がある。井上靖は該当部分を読み、加藤九祚の教示もあって、その時代設定を考え出したのであろう。以前より匈奴に興味を抱いていた作者の、遊牧民への関心が反映された設定とも言える。

また物語の前半、「首長の家」で開かれる「聚会」の場面において、「古老たち」が登場する。彼ら「古老たち」は、〈泉の信仰〉を

改革せんとする主人公「若者」の発言を「不遜」と捉え、「若者の心」に「悪魔」の存在を見るなど、「聚会」において権力を持つ存在として描かれている。この設定も加藤九祚が授けた知識に基づくと言えよう。加藤の訳書であり、井上靖が序文を書いた『ソグドとホレズム』(一九六八年三月)の中に、「サカ人」の「種族」の「最高指導者」の「権力」は「長老会議によって制限されていた」と記されている上に、一九六五年一〇月初出の加藤の文章の中に、「中央アジアやカフカス」の民族では、「老人」が「家族の諸問題については、ほぼ絶対的な権力をもって」おり、「部落のことも彼らの合議によって決せられ」と解説されているからである。他にも「ギリシア人がスキタイと呼び、ペルシア人がサカと称した種族」という「聖者」冒頭部に記された文言は、『ソグドとホレズム』における「ギリシア人はスキタイと呼び、ペルシア人はサカと称したさまざまな種族」との記述に重なるし、「(サカ人たちは) 彼の遊牧民族の侵寇に対しては氏族連合という形で当たっていた」という「聖者」の表現は、やはり『ソグドとホレズム』における「スキタイ・サカ人は) 軍事的危険に対する防衛や遠征に際してはたがいに連合した」との解説を参照していると見られる。

つまり「聖者」にはイシク・クル湖伝説以外にも、特にサカ族に關わる表現について、加藤九祚から授けられた知識が多く活かされている。井上靖は伝説に拠ったこの小説を、ただなる伝説にとどめ

ず、その表現に史的な裏付けを持たせようと言えよう。

## 二

こういった「聖者」の表現の中から、「泉」が「信仰の靈地」とされる「聖者」における物語の柱というべき設定に注目し、その創造の過程を追ってみたい。

まずこの設定に関しては、イシク・クル湖伝説の後に「特別の性質をもった井戸」が登場するので、そこに着想を得る一つのきっかけがあったと言えよう。

次いで前者の伝説における「異端の住民」という言葉。それに加藤の訳書『湖底に消えた都』の中で、サカ族は「拜火教」を信仰していたと解説されていること。井上靖はこれら二つを手掛かりにしながら、逆説的に想を膨らませたと推察できよう。例えば他氏族で育った主人公(「若者」)が、生まれ故郷の(「泉の信仰」)に触れた心境について、「若者は火を神として崇めて来てはいたが、泉を神として崇めるような信仰にぶつかったのは初めてのことだった」と記している。その上(「泉の信仰」)を軽視する「若者」に対して、聚落の人々の視点から、「異端の若者」とも形容している。要するに井上靖は、本来拜火教を信仰するサカ族の中の「異端の住民」として、(「泉の信仰」)を持つサカ族の一聚落を創り出したのである。

加えて作中の「泉」は「巨大な円形の屋蓋」に覆われ、入口から「螺旋

旋状に刻まれてある石の階段を降り」た場所に存在する。これは一九六八年五月のソビエト旅行の際、ウズベク共和国の沙漠の町「ヒワ」で見かけた回教学校の「井戸」に基づく表現と言える。ともにソ連旅行について綴った「第二回トルキスタン紀行」（一九六九年一月〜六月『太陽』）および「西域物語」で、井上靖はその「井戸」を「聖者」の「泉」とほぼ重なるイメージで紹介しているのである。特に「第二回西トルキスタン紀行」では、「十九世紀の初めにはこの井戸は水量多く、ヒワの全住民がこの水で生活した」という案内書の記述が挙げられている。「聖者」において「泉」が聚落の中でただ一つであるのは、このヒワの「井戸」の過去の姿に拠った設定と言えよう。しかも「西域物語」によれば、そのヒワの「井戸」は、「全然水がないわけではないが、もうそこから水が湧き出しているとは思えぬ」状況であつたらしい。その実際に見た「井戸」の、半ば涸れた情景がやはり土台となつて、殺到した兵士たちによって「すっかり水を汲み上げられ」「底に沈んでいた大きな石を露出し」ているという、「聖者」終盤での「泉」のイメージが表されたと解釈できるのである。<sup>11)</sup>

このように「聖者」における〈泉の信仰〉は、加藤九祚から得た知識やソビエト旅行での見聞に基づきつつも、そこからさらに想像を広げ、削り上げた設定であつた。そしてその井上靖の想像の広がりの結果として見逃してならないのは、「水は首長から牧夫まで一

日に定められた大きさの甕一杯ずつしか汲むことを許され」ないという、泉に関わる〈掟〉が設けられていることである。この〈掟〉については、加藤の訳書等にも典拠らしき記述は認められない。<sup>12)</sup> 作者のほぼ完全な創作として、ここに一つの創意を見ることができよう。すなわち井上靖は〈泉の信仰〉をただなる宗教的表現に収めず、「一人甕一杯の水」という掟を創り出すことで、古来より人々の生活を支えてきた規則、いわば伝統的な慣習や社会規範の象徴として表している。「聖者」は伝統的な慣習や社会規範に対する人々の関わり方を表した小説として、ひとまず捉えられるのである。

### 三

「聖者」における主な登場人物について検討を加えたい。

まず泉を守る〈聖者〉。先に見たごとく、伝説の中に典拠が認められる登場人物ではある。しかしその人物像については、「聚落民の誰よりも高齢」の上、「言いて聲である許りでなく啞で」もあって、一見すると「廃人同様」の老人という、伝説には見られない形に表されている。この〈聖者〉像には、一つには先に見た加藤九祚から学んだ知識、つまり「サカ人」や「中央アジア」の民族における老人の地位の高さが反映されているよう。そしてそれだけでなく、「聖者」と前後する時期に書かれた井上靖の小説に登場する人物像から判断すれば、作者の創作による部分も大きいであろう。

井上靖は「夜の声」（一九六七年六月二日）一月二七日『毎日新聞（夕刊）』において、交通事故で頭を打って以来、「神の声を聞いた」と思い込み、万葉集の世界に生きる六十二歳の千沼鏡史郎を主人公に据えている。彼の視点から、自動車が氾濫し、自然が失われていく現代を「魔もの」に侵された社会と難ずる。また「樺の木」（一九七〇年一月一日）八月二五日『日本経済新聞』においては、「精神状態に一点訝かしいもの」を感じさせるほど、愚直なまでに樺の木に保存に執着する「けやき老人」を登場させ、緑を守る大切さを訴えている。さらに「四角な船」（一九七〇年九月一日）七月一日五月一六日『読売新聞』でも、ノアの洪水到来を信じる狂人「葦」によって、「ハコ船」に乗せるべき人物の一人として、佐渡の漁村で暮らす「盲目の老婆」を選ばせている。

この当時、井上靖は、健常者と認めがたいくらい、一見すると無能にも思える老人の中に、むしろ社会を正す神聖さを見出していたのである。泉を守る〈聖者〉像にも、このような井上靖のモチーフが反映されていると言えよう。より踏み込んで言えば、伝統的な慣習や社会規範には、一見すると無力、無意味に思える部分があること、部外者や若い世代には、得てしてそのように捉えられがちであること、しかし無意味に思えたその伝統が、実は社会の方向性を正し、健全なる生活を支えていることを、その〈聖者〉像により表現していると思われることができる。

次いで「聖者」の主人公「若者」について取り上げたい。既に見た〈聖者〉像がそうであったように、この「若者」においても、モデルに当たる人物がイシク・クル湖伝説の中に一応認められる。井上靖は小説の主人公を造形するにあたって、前者の伝説の中から「大へんな放蕩をひろめた」人物である「罪深い女」に注目した。しかしその「罪深い女」をそのまま主役に据えるのではなく、後者の伝説の中から、鍵をかけた忘れられた少女の、その「恋人」に注目し、若き男性であるところの人物に「罪深い女」の役割を重ねることで、「聖者」の主人公「若者」を創り出したのである。

井上靖は「若者」をかくのごとく造形しながら、加藤九祚から得た知識に基づいて登場させた「古老たち」と対立させる。そしてその「若者」にさらに〈泉の信仰〉を恐れず、積極的に改革する役割を負わせている。このような人物像じたいは、加藤九祚の教示によるものでなく、同時代の社会状況が深く関わっている。

井上靖は「聖者」発表の直後に著したエッセイ「職人かたぎ その他」（一九六九年九月『心』）の中で、「長い歴史と伝統に培われた」「その国特有の美しさ」がどの国でも失われつつあること、特に日本では「古いもの」が「切り棄て」られつつあることを不安視している。そしてその一例として「大学の組織そのものも根柢から揺すぶられている」ことを挙げ、「明治以来学術文化の発展に大きく寄与してきた」「師と弟子の関係」「教える者と教えられる者との



「関係」を「否定」するのでなく、「その中の美しく価値あるものは大切」にすべきことを主張している。

ここで言う「大学の組織」が揺すぶられている問題とは、言うまでもなく、文章が書かれた前年、一九六八年から全国各地で活発化していた〈学生運動〉を指す。右のエッセイと小説「聖者」が発表された一九六九年においては、一月に東京大学安田講堂で学生と警察機動隊による攻防戦が繰り広げられ、その影響で三月の同大学入学生試験は中止された。まさに学生運動の昂揚、過熱がピークを迎えた一年だったのである。つまり学生運動という形で日本の伝統的な「教える者と教えられる者との関係」が否定されていること、言い換えれば、大学教授ら年長者に対して、若者たちの多くが、時に暴力さえ伴った方法で抗議を続けることに井上靖は批判的な思いを抱いていた。だとすれば「古老たち」と対立しながら強引に〈泉の信仰〉を改革していく「聖者」の主人公像にも、井上靖のそのような現代の若者たちに対する批判が寓意されていると分析できるのである。

ただし「聖者」の物語全体を見渡してみると、主人公の「若者」は必ずしも否定的に描かれておらず、むしろ好意的に表されている部分が認められることにも注意したい。

例えば「若者」が聚落に初めて姿を現した場面では、「この聚落のいかなる若者よりも逞しい広い肩と鋭い眼を持った、見るからに

非凡精神な若者であった」と記されている。「動作はきびきびしており、威は自らその挙措進退に具わっていた」とも形容されている。「若者」の風貌と動作に対して、「古老たちはそれぞれに驚嘆の声を口から出し」てさえるのである。「若者」は実は有能な人物として描かれていると見てよい。

また「若者」が「一人壘一杯の水」から一人「二杯」へ改めた当初の結果として、「聚落の男女は見違えるほど働き者になり、快活になった」こと、「裕福」で「活気のある聚落」へ変化していることを見逃してはならない。ここまでの結果に限り言えば、「若者」は「古老たち」が捕われていた、いわば因襲を打破した改革者の趣さえ呈しているのである。

もちろん〈泉の信仰〉がただなる因襲でなかったことは、最終的な結論において判明している。「若者」は結局、一見無意味に思える伝統が社会を支えていることに理解がなく、その行動は慎重さを欠いていたと言わざるをえない。

つまり井上靖は、何時の時代にあっても社会改革を推進していく若い世代の実行力に目を見張り、その側面じたいは肯定している。しかし、その上で井上靖は、執筆時に満六十二歳に達していた自らを「古老たち」のごとき年長者の側に立たせ、現代の若者たちの慎重さを欠いた行動に警告を発しているのである。まぶしいまでの行動的エネルギーを持ち、その過剰なエネルギーが時に貴重な伝統を



破壊さえしてしまふ。そのような同時代にありがちな若い世代の典型として「若者」は表されているのである。

「若者」像に関連して、この小説における、いわばヒロイン役「娘」の人物像についても記しておきたい。イシク・クル湖伝説では井戸の鍵を忘れられて〈神の怒り〉を招いた「ひとりの少女」が登場する。その「少女」をモデルにしなが、〈聖者〉に代わって泉の鍵の開閉をする「娘」として描かれるのである。泉の鍵をかけられなかったのも、小説では「娘」の過失でなく、「若者」が「娘」を自分の寝室に無理やり押しとどめたからである。「娘」は「若者」と対照的な信心深い人物だと言ってよい。そのような「娘」に心を奪われ、強引に思いを遂げようとする「若者」の姿を描いていくことで、主人公のいわば〈今時の若者らしさ〉は効果的に強調される。危うさを含んだ行動力がより鮮明に浮かび上がるのである。また「若者」から「娘」への、恋愛感情を記すことで、伝説に基づくこの歴史小説の中にも、幾分かの甘さを加味する狙いもあったと言えよう。

以上より「聖者」は、当時の日本社会において、特に若い世代が伝統的な慣習や社会規範と、どのように関わっていたか、古代西域の中に諷刺した小説と捉え直せるのである。

#### 四

同時代の日本社会へ向けた井上靖のメッセージを、より具体的に把握するために、今度は「若者」が聚落の人々に与えた影響について考察したい。

「聖者」の物語中盤、「若者」が聚落の新首長に就任したことで、人々は直ちに次のような体験をする。

その夜、新首長の家の前には火の祭壇が設けられ、兵たちは聚落中から徴収した酒を浴びるように飲んで、際限なく酔い痴れた。火は深更まで赤々と焚かれ、それを回って為される兵たちの荒々しい乱舞は、この聚落が初めて経験する騒擾として聚落民のただ一人をも眠らせなかった。

さらに物語後半、「若者」の改革によって裕福になるも、これまでは異なる空気に覆われてしまった聚落の様子が次のように描かれている。

若い男女は夜毎草原に集まって踊ったが、そこで行われる踊も、歌われる歌も淫らかなもの許りであった。大人たちの中に、こうした風潮を顰蹙する者も一部にはあったが、大部分の大人たちは若者たちを批判する資格は持っていなかった。彼等自身すっかり淫靡な空気に染まっていたからである。

これらの表現を考えるにあたって、「聖者」と近い時期に発表さ

れた同じ作者の文章を改めて参照してみたい。

井上靖は、前にも触れた「夜の声」の中で、千沼鏡史郎に自動車の氾濫を慨嘆させるだけでなく、現代社会において「もう都会には、夜はない」ことや、男女が「抱き合って歩」いたり、若者たちが「徹宵酒を飲んで踊ったり楽器を鳴らしたりする」ことにも批判的な言辭を吐かせている。またエッセイ「異国で考える日本」（一九六八年一月『自由新報』）では、「異国にあつて自分の国について考えること」には否定的な要素と肯定的な要素があると記し、否定的に感じられる現代日本の状況として、「どうしてあんなに流行を追うのだろう。どうしてあんなに酔っ払いが多いのだろう。どうしてあんなに街には大きなネオンの広告がひしめきあっているのだろう」との疑問の言葉を並べている。<sup>13)</sup>

「聖者」の発表年も含めた一九六〇年代後半、日本社会はGNPが世界二位へ躍進するなど、かつてない経済成長、いわゆる「へいざなぎ景気」と呼ばれる好景氣を迎えていた。人々の生活は裕福になり、都市部の夜はネオン・サインで一晩中明るく、行き交う人々の喧騒がいつまでも聞こえてくるようになった。〈昭和元祿〉とさえ言われた平和かつ豊かな世相の下で、過激な学生運動が発生する一方、長髪で奇抜な服装、時にシンナー遊びに耽る若者たちが東京の盛り場にたむろし、フーテンとかヒッピーと呼ばれていた。特に六九年に至ると、ブラウン管から性的な刺激を強調した映像が流れ、

それが人気番組として、若い世代に限らず、多くの人々の注目を集めさせた。<sup>14)</sup>

「夜の声」や「異国で考える日本」の中で、そして「聖者」においても、井上靖がこのような「へいざなぎ景気」下の日本に対して批判を試みていることは明白であろう。「若者」像に同時代の若者の姿を暗示させたごとく、先の引用の前者には、その頃から見られ始めた都会の夜の、いつまでも明るく騒々しいあり様を、後者においては、国民全体にみだらな空気が蔓延していた当時の社会風俗を、それぞれ読者に想起させるべく、皮肉を込めて表現しているのである。

ここでイシク・クル湖伝説にいま一度目を向けると、そこでは人々の間に広まった「大へんな放蕩」は、あくまで「ひとりの罪深い女」に起因していた。対して「聖者」の場合も、「淫靡な空気」が生じたそもその原因は、「若者」が「一人壺一杯の水」という「泉の信仰」を改めたことにあった。しかし、その改革によって直ちに「淫靡な空気」が広まったのでは決してない。改革の効果として、まず聚落は裕福になり、その裕福さがもたらしたマイナス要因として「淫靡な空気」は生まれたのである。ここに好況下の日本社会に対する井上靖の一つの見解を見ることができよう。近年日本人の生活水準（あるいは経済力）は確かに向上した。しかし日本人のモラル（特に性的なモラル）はそれに合わせて向上しておらず、両者はむしろ反比例の関係にある。生活が豊かになればなるほど、日本人の欲望

は拡大し、その分モラルは低下してしまつたと井上靖は捉えているのである。

だとすれば「一人甕一杯の水」という泉の掬が表すところも、いさ少し深い部分から捉え直すことができよう。一人甕「一杯」か「二杯」かという泉から汲み出せる水の量は、社会の中で認められる欲望の許容量の象徴なのである。「若者」がそうした水の制限量に手をつけたことは、古来より抑えられてきた聚落の人々の欲望について、歯止めに向たる部分を解除してしまつたことに他ならない。だからこそ人々の欲望は肥大化していき、聚落は「淫靡な空気」に覆われることとなつた。井上靖は人々の欲望を制御するためにも、社会を支える伝統的な慣習、規範が必要であり、それを遵守すべきことを〈泉の信仰〉という形で同時代の日本社会に向けて主張しているのである。

最後に「聖者」の冒頭から間もない本文に注目したい。井上靖は舞台であるサカ族の一聚落の風景を次のごとく形容している。

聚落は盆地のほぼ中央部、小さい丘陵が波打つて高原地帯の様相を呈している地域にあつた。住民たちの住居はあるものは高処にあり、あるものは低処にあつて、従つて聚落の中には曲りくねつた坂道が多かつた。その坂道の両側にも、住居の周辺にも濃い緑の葉を持つ樹木が繁つていて、遠くから見ると聚落全体がすっぽりと鬱蒼とした森に包まれていた。

冬季には一カ月間降雪を見るが、他の季節は氣候概して温暖で雨量も多かつた。

高原地帯にあつて坂道が多く、しかも冬に降雪を見るも氣候は概して温暖な土地にある聚落と言へば、伊豆半島山間部の湯ヶ島、井上靖の故郷にそのまま当てはめることができる。中でも井上靖が幼少年期を過ごした明治末から大正期にかけて（一九一〇年代）の湯ヶ島に目を向ければ、そこには伝統や慣習を大切にしている人々が存在し、まだつつましやかな暮らしが見られたであろう。その分、人々の欲望は制御され、若い世代も年長者も、言動には適度な抑制が為されていたに違いあるまい。

「聖者」の物語序盤、「若者」が現れる以前のサカ族の一聚落について、井上靖は泉を尊崇する住民による平穏な暮らしを強調していた。そのことも考慮に入れると、特に物語序盤におけるサカ族の一聚落の中には、作者の幼少年期における湯ヶ島のイメージが、当時の人々の生活を含めて少なからず投影されていると言えよう。そしてサカ族の一聚落に「若者」が登場し、やがて聚落の住民たちのモラルが崩壊していくその物語の過程においては、井上靖の幼少年期から「聖者」執筆に至るまで、約五十年間における日本社会の変化が凝縮されていると捉えられるのである。

かくて「聖者」はイシク・クル湖畔の伝説に材を取りながらも、そこには経済成長の下で伝統が軽視され、急激に変化していく日本

人の生活と行動に対する井上靖の批判的な見解が託されており、同時代の社会に向けた諷刺小説とも言い得るのである。

## おわりに

「聖者」にはイシク・クル湖伝説を初め、サカ族に関わる表現など、加藤九祚から授けられた知識が多く活かされている。井上靖は「天平の薨」（一九五七年三月～八月『中央公論』）の執筆で鑒真研究者・安藤更生の、「敦煌」（一九五九年一月～五月『群像』）では東洋学者・藤枝晃の教示を仰いだごとく、この小説でも研究者の意見を参照しながら、伝説的かつ歴史的な作品世界を創造したのである。いわゆる歴史小説における、より精確な記述を志向する井上靖の謙虚かつ真摯な創作姿勢が、「聖者」でも、やはり継承されていると言えよう。また曾根博義も指摘しているように、井上靖は「聖者」発表前後の時期に、本論でも少し取り上げた「夜の声」「櫻の木」など、同時代の日本社会へ向けた警告をモチーフとする小説を執筆している。「聖者」における社会諷刺の姿勢は、紛れもなくこれらの小説に連なるものと言える。ただし「聖者」の場合、古代中央アジアという舞台の性格もあって、「夜の声」「櫻の木」で為された自然破壊や公害に対する批判を見ることはできない。代わりに「聖者」では、二つの小説において公害批判の合間に記されていた若い世代への警告が前面に表れ、さらには豊かな社会の中で際限なく肥大化してい

く日本人の欲望、それに伴うモラルの低下を批判する、作者独自のモチーフが表されていた。

西域を舞台にした伝説を加藤九祚の教示に拠りながら膨らませつつ、伝統的な慣習、社会規範を重んずる視点から同時代の諷刺を試み、伝説、歴史と現代を交錯させた小説として、「聖者」は井上靖文学の中でも特異な位置を占める一作と見做せるのである。

## 注

- (1) 「敦煌」を評した亀井勝一郎「壮大な叙事詩」（一九五九年一月三日『週刊読書人』）など参照。
- (2) 藤沢全編「井上靖年譜」（新潮社版『井上靖全集』別巻、二〇〇〇年四月）参照。
- (3) それぞれの旅について記した「第一回西トルキスタン紀行」（一九六六年一月～九月『太陽』、初出タイトル「西域の旅」）「第二回西トルキスタン紀行」（初出タイトル「西域紀行」）において、どちらも同行者として加藤九祚の名が挙げられている。
- (4) 考察に取り上げた二つの伝説以外には、「ミダス王についての有名なギリシア神話によく似た伝説や、「地震」によって「湖から水が恐ろしい勢いで流れこみ、すべては広い湖の底に消え去った」ことを「詩的」に語った伝説が紹介されている。
- (5) この伝説には、以下の「変形」があることも追記されている。（「前略」）  
遠いむかし湖岸には多くの都市や集落が栄えていた。しかし神さまは住民の不信心と放蕩を罰することになった。すなわち湖の東岸の広い地域が町や村をのせたまま沈没し、『不信心の徒が湖水に吞まれた』のだという。こ

の話のもう一つの変形では、都市の放蕩な住民がイスラムの聖者を心よく迎え入れなかったために神の怒りをかゝり、大地が揺れ、都市は沈没し、その跡に湖ができたことになっている。これらのうち、後者の「変形」に登場する「聖者」と「聖者」を「心よく迎え入れない」「放蕩な住民」は、考察に取り上げた二つの伝説と併せて、「聖者」の物語の骨格に活かされていると言えよう。

(6) この伝説も以下の「変形」が追記されている。「少女が鍵を紛失したために井戸に鍵がかけられなかったともいい、あるいはまた、少女の両親が二人の結婚を許さなかったために、恋人がその友人の手をかりて、井戸のそばで少女を盗み去ったからだともいう。」

(7) 井上靖は『西域物語』で二つの伝説を以下のように紹介している。「その伝説というのはなかなか面白いものである。——昔、いま湖になっているところは美しい平野になっていて、平野には幾つかの町が繁栄していた。人々は平和に豊かに生活していたが、ある時一人の魔女がやって来て、町の人たちをすっかり墮落させてしまった。天山山中の静かな美しい町は、忽ちにして淫蕩な騒がしい町に変わった。これを見てすっかり腹を立てた神は、一夜にして町を水びたしにし、一帯の地を今日見るような湖にしてみました。／＼また、こういう伝説もある。——いま湖になっているところに、昔一つの町があった。町の人たちは平和に楽しく暮らしていた。この町のただ一つの欠点は泉が一つしかないことで、町中の人は毎日のように壺を持って、泉に水を汲みに行った。泉には鍵を預かる聖者がいて、人たちはその鍵番の聖者から鍵を受取って、泉の水を汲み、汲み終ると、泉に鍵をかけ、再びその鍵を聖者に返す掟になっていた。ところが、ある時、ひとりの娘がこの掟を守らなかつた。彼女は水を汲んだあと、恋人と愛の囁きを交すのに夢中になってしまつて、鍵を鍵番の聖者に返すことを忘れてしまつたのである。恋人たちが鍵のことを思い出した時はもう遅かつた。泉からは

水が噴き出し、もうどんなことをしても、それをとめることはできなかった。見る見るうちに町は水びたしになり、何日もたたないうちに、町は水の底に沈んでしまつた」。加藤九祚の訳書に見る二つの伝説に沿いながらも、後者においては「井戸」でなく「泉」と表記され、またその「泉」が町に「一つしかない」と記されるなど、典故には見られない、いわば小説「聖者」に近い記述も見られる。この文章を書いたことが、井上靖の中で、「聖者」創作の準備の役割を果たしたと言えそうである。

(8) 井上靖は「聖者」の発表から約十四年後、「イシク・クル」と題する以下のような散文詩を書いている。ここにも「サカ族」を登場させているのは、自ら創造した「聖者」の世界を、そのまま活かした為であろう。

「天山の山ふところに、琵琶湖の九倍くらの大きな湖・イシク・クルがしまわれている。そしてその湖底には一つの集落が、もしかしたら時代を異にする幾つかの集落がしまわれている。ソ連科学アカデミーによる一九五八年の湖底調査の報ずるところである。更に古くから湖畔に伝わる伝承を信ずるとすると、その湖底の集落には、往古のサカ族の神への祈りと、その祭壇がしまわれている筈である。／＼十九世紀のロシアの探検家・ブルジェワリスキーは、その遺言によつて、イシク・クル湖畔に眠っている。探検家の墓所として、これ以上のところはない。」(井上靖・樋口隆康・NHK取材班著『シルクロード ローマへの道 第九巻 大草原をゆくソビエト』(一九八三年二月、日本放送出版協会)掲載)

(9) ヤクポーフスキー他の執筆による中央アジアに関する論文を六本収録したガリ版刷りの私家版。本論で取り上げた本文は同書の第一章・S・I・ルデンコによる論文「パジリク古墳の秘宝」の第一節「スキタイ・サカ人」に見られるものである。同書は一九六九年五月、収録論文を一部改め、井上靖による新たな序文も載せ、『西域の秘宝を求めて——スキタイとソグドとホルズム——』と題して、新時代社より出版された。

(10) 『世界地理風俗大系・第21巻ソビエト連邦Ⅰ』(一九六五年一〇月、誠文堂新光社)に掲載された解説文「カフカス」。この文章は、後に井上靖がやはり序文を書いた加藤の論文集『西域・シベリアータイガと草原の世界』(一九七〇年二月、新時代社)〈以下、『西域・シベリア』〉に収録されている。(11) 井上靖は「第二回西トルキスタン紀行」の中で、ウズベク共和国の砂漠の町「ヒワ」で見かけた「井戸」について次のように書いている。「この二階建ての建物にぐるりと囲まれた広い庭に井戸があったが、井戸は円形の屋根で蓋をされており(中略)入口からはいると十五段の急な石の階段が螺旋状に設けられてあって、地下の円形の泉に降りられるようになっていゝ。泉の直径は約五メートル(中略)。案内書を見ると、十九世紀の初めにはこの井戸は水量多く、ヒワの全住民がこの水で生活したと書かれている」。また「西域物語」の中では、同じ「井戸」を次のように書いている。「私たちは、この幻覚の町で、大きな回教学校の校庭で井戸を見た。ぎっしり煉瓦でたたまれている広い校庭の中央部に異様な形をした突起物があった。腕を伏せたような形をしており、一方に出入口があった。そこをはいって何段かの螺旋型に曲った階段を降りて行くと、一番下に泉があった。正確に言えば泉の跡があった。全然水がないわけではないが、もうそこから水が湧き出しているとは思えなかった。曾てこの回教学校が活発に活躍している頃、生徒も、町の人たちもここに水を汲みに来たのである。」

(12) 加藤九祚の訳書『湖底に消えた都』『ソグドとホレズム』、著書『西域・シベリア』のほか、『湖底に消えた都』『あとがき』で加藤が書名を挙げている松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究』(一九五六年一月、早稲田大学出版部)、『ソグドとホレズム』第一章で言及されているヘロドトス『歴史』(青木巖訳、一九六八年四月、新潮社)、井上靖が「第二回西トルキスタン紀行」『西域物語』でキルギス共和国およびその周辺地域に関連して書名または著者名を挙げている『漢書』『西域伝』、西徳二郎『中亜細亜紀事』(一八八六年九月、陸軍文庫)、足立喜六『大唐西域記の研究(上)』(下)(一九四二年一月、四三年六月、法蔵館)、ヘディン『彷徨へる湖』(岩村忍・矢崎秀雄訳、一九四三年四月、筑摩書房)、セミョーノフ『天山紀行』(樹下節訳、一九五八年六月、ベースポールマガジン社)、ブルジェワルスキー『黄河源流からロブ湖へ』(加藤九祚・中野好之訳、一九六七年一月、白水社)、ランスデル『西トルキスタンへの旅(上)』(下)(大場正史訳、一九六八年一月・三月、白水社)、同じく井上靖が西域エッセイでたびたび触れている白鳥庫吉による『スキタイ・サカ(中国名「塞」)』に関する論文『塞民族考』(『西域史研究(上)』一九四一年九月、岩波書店)、さらに「聖者」発表の直前に開催された東京国立博物館「スキタイとシルクロード美術展」(一九六九年四月一六日〜六月一日)の図録解説(一九六九年四月、日本経済新聞社制作、同美術展を特集した美術雑誌『三彩』一九六九年五月号(加藤九祚「スキタイの秘宝を求めて」スキタイ発掘物語)掲載)などを調査したが、〈泉の控〉の典拠と断定できる記述は認められなかった。以下に考察する「聖者」像、「若者」像も同様である。

(13) 井上靖は「異国で考える日本」の末尾で、「今年は春にロシア領の西域に一月の旅を計画し」ており、そこで「私は、また日本のことを考えるであろう」と記している。この「一月の旅」とは、先に言及した一九六八年五月のソビエト旅行である。井上靖はこの旅で実際に同時代の日本社会についてさまざまな思いを巡らし、また加藤九祚よりイシク・クル湖伝説について知識を授けられ、その当代日本に対する考察と、伝説に関する知識が結びついたことで、小説「聖者」が生み出されたことでもきょう。

(14) 一九六九年には、例えば人気コメディグループのメンバーと女優がじゃんけんをし、敗れた方が服を脱いでいく〈野球拳〉を目玉コーナーに据えたテレビ番組が放映を開始し、注目を集めた。また「OH! モーレッツ」と言いながら女優のスカートがめくれ上がる刺激的なテレビCMが流れたの

もやはり一九六九年であった。なお一九六〇年代後半の社会状況の考察にあたって、以下の文献を参照した。『一億人の昭和史』⑧日本株式会社『功罪』（一九七六年九月、毎日新聞社、昭和史研究会編『昭和史事典』（一九八四年三月、講談社）、中野取著『現代史のなかの若者』（一九八七年四月、三省堂）、岩間夏樹著『戦後若者文化の光芒』（一九九五年一〇月、日本経済新聞社、『朝日クロニクル・週刊二〇世紀』23〜27（一九九九年七月一日〜八月八日、朝日新聞社）。

\*井上靖の作品引用は、新潮社版『井上靖全集』全二八巻別巻一（一九九五年四月〜二〇〇〇年四月）に拠った。引用文中の旧字体は新字体に改めた。

#### 【付記】

本論は中国外国文学会日本文学研究会第十三回全国大会・国際学術シンポジウム（二〇一二年八月一八日〜二〇日、蘭州大学）における口頭発表「井上靖『聖者』論―歴史と現代―」を再考察の上、副題を改め、文章化したものである。先に王君訳による中国語論文「井上靖《圣人》論―伊塞克湖传说与現代―」として、魏大海・李征・譚昂華編『日本文学研究―交錯する歴史と創造空間―日本文学研究会蘭州大会論文集（日本文学研究―歴史交汇与想象空間―日本文学研究会兰州年会论文集）』（二〇一四年八月、青島出版社）に掲載されている。日本語論文としては未公開のため、本誌に改めて発表した。

―たかぎ・のぶゆき、別府大学教授―